寄贈品コーナー「七ノ域遺跡展」

期間：平成11年１月５日～２月14日

平成１０年３月に平塚市教育委員会から『七ノ域遺跡―第２地点―』の発掘調査報告書が刊行されました。調査は平塚市遺跡調査会が平成３年５月２８日から１１月３０日と平成４年４月１１日から５月２５日までの２回に分けて実施されています。調査面積は２２９８㎡と大規模なものです。今回、平塚市教育委員会社会教育課のご協力により、その成果を紹介します。

標高約９ｍの砂州・砂丘に立地した七ノ域遺跡は土師器散布地として周知されています。今回の調査成果でも古代を中心に多くの遺構と遺物が発見されています。遺構は竪穴住居址３４基、掘立柱建物址６棟、井戸址５基、土坑１６基、不明遺構３基、溝状遺構７８条、ピット５４７基の計６８９基が発見され、遺物は縄文土器片、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、陶磁器、金属製品、石製品、墨書土器など総重量２５０kgと膨大な遺物が出土しています。遺構と遺物から、この遺跡は奈良・平安時代を中心として展開されたことが分かります。

遺物の中から面白いものを幾つか紹介します。一つは住居址から出土した錠前を開ける鍵です。全国で出土した鍵の中で最大の 14,3 ㎝を測るもので、また柄の部分に螺旋状の捩りの溝が加工されている大変貴重なものです。同規模のものは藤沢市南梶山遺跡の一例、螺旋状に加工されたものは奈良県平城京の長屋王邸宅跡と東京都の落川遺跡と二例しか出土していないもので、この大きさで柄に捩りの加工したものは、現時点では日本初発見といえます。

二つ目は９世紀後半に不明遺構から出土した墨書土器の内面に「安宗太田部麻呂□伏」「伏□□□□□□□安」と縦に２行に同じ文字が折り返された大変珍しい内容のものです。外面には「仁」の文字が書かれています。しかし、この文字の意味については分かっていません。平塚で出土した最多文字の墨書となります。出土した遺構の性格も分かっていません。しかし、個人的な考えでは、一つは「伏」と「仁」の意味から、比較的有力な官吏または富裕な豪族の墓地と考え、石は墓標的な意味かと思います。そうすると、墨書は「郡名＋人名＋□」の記載順と考えます。もう一つは土師器甕と小型甕は土坑の中に埋設されたような出土状態であること、大きな石がそばにあること、遺構は竪穴住居的であることから、鍛冶工房に関連した施設とも考えられます。

三つ目は、発見された遺構には奈良時代前後の竪穴住居址がかなり見られ、同時期と考えられる南北に延びる溝が注目されます。この遺跡は相模国府関連遺跡群の一画に入ります。国府は旧国造の拠点（伊勢原市比々多周辺）に設置されたものではなく、新たに中央政府の意向によって官道（東海道）に沿って８世紀前半に造営されたものです。国府が完成するまでに、大住評家（郡衙）を造営し、そこに国宰（国司）が居住したと考えます。本遺跡の奈良時代以前の竪穴住居と区画溝は、評家の一部と理解します。稲荷前Ａ遺跡の８世紀第２四半期の「大住厨」墨書土器、天神前第７地点の８世紀初頭の鍛冶工房跡はそれを傍証する資料かと思います。

このように、この遺跡の持つ意義は単に国府関連遺跡と捉えるのではなく、国府成立以前の大住評家としての位置づけをすることによって、より一層の相模国府問題が明らかにされるものと考えます。